



仲間と共に



令和3年度 <三輪南小 学校だより>

令和3年9月29日

人にやさしく：一人一人の意識を高めて生活

校長 小野木 義浩

「一斉登校」

9月27日より子どもたちの一斉登校が始まりました。

新型コロナ第五波はピークアウトを迎え、全国的に新規感染者数や重症者の人数などは減少傾向にあります。現在は、高齢者よりも40代以下の若い世代の新規感染者の割合が多く、子どもの感染者也増えています。今後も、みんなで対策をきちんと行い、安全で安心な学校生活を守っていきます。

さて、コロナ禍の生活が1年半以上も続き、誰もが不安や不満などを抱えています。だからこそ、私たち教職員は、今まで以上にアンテナを高く、さらに高感度にして子どもたちを見ていく必要があります。子どもたちは一見平気なように見えても、心の中では不安や困り感をもっているという認識のもと、私たちは子どもたちに寄り添っていくことを確認しています。

「人にやさしく」

コロナ禍になり、子どもたちには特に「人にやさしく」と繰り返し話しています。

「人にやさしく」という観点で、コロナ禍の学校生活を見つめてみます。

例えば、マスク。「マスクをきちんと正しくつける」という約束があります。(体質的・精神的にマスクの感触が苦手の場合もありますが・・・)しかし、時々「あごマスク」「鼻出しマスク」の子を見かけます。そんな時、子どもたちに「マスクは何のためにする必要があるのかな?」と投げかけます。話してみると、子どもたちの中には、マスクはウイルスから自分の身を守るためのものと考えている子が少なくありません。そのため、マスクの正しい着用の意味を知ることによって子どもの意識が変わります。マスクを正しくつけることは、「人にやさしく」につながることであることがわかります。

新型コロナウイルスは、感染していても無症状の場合が多いです。だからこそ、「自分は無症状であっても新型コロナウイルスに感染しているかもしれない」と考え、正しいマスクの着用には相手に感染させないための役目となると考えられています。マスクを正しくしていれば、自分の飛沫を飛ばすことを防ぎ、自分の大切な人、友達にウイルスを感染させないようにできます。これは、生活のマナーであり、人にやさしい行為です。何気なくマスクをしていた子どもたちにとって、マスクを正しくすることの意味がわかることで、よりよい行動への意欲につながります。頭ごなしに「マスクをしなさい」ではなく、その意味や価値を子どもたちが知り、納得してやることは何事でも大切です。

「今こそ偏見や差別ではなく助け合うとき」

6年生の子が書いた夏休みの読書感想文(「命のビザ」を発行し多くのユダヤ人の命を守った杉原千畝の本を読んだの感想文)にこんな文章がありました。一部抜粋します。

「・・・今、世界中が新型コロナウイルスに生活や命がおびやかされている。僕がどんなにコロナ対策をしても、日々感染者が増えていく。東京都は特に。僕は、東京ナンバーの車を見ると『うわ! コロナかも!』と思ってしまう。東京だけでなく感染者が多い地域には『行きたくないな』と思ってしまう。これは、偏見や差別そのものではないか。ユダヤ人迫害と同じだ。・・・学校や家族に偏見や差別をせず、正しい判断をすることが大切だと1年間教えてもらい続けたのに。だから、今日から僕は変わろうと心に決めた。正しい判断をして、偏見や差別をなくす。そもそも、コロナに感染したい人なんていない。みんな同じ恐怖の中にいるのだ。今こそ偏見や差別ではなく助け合う時だ。・・・」

「もし自分だったらという想像力」

コロナ禍で、我慢が多いときです。不安や不満で心がいっぱいになるときもあるかもしれませんが、「人にやさしく」を合言葉に、お互いを思いやり、安心して生活できるようにしていきましょう。

そのためにも、「もし自分だったら」という豊かな想像力が一人一人に求められています。

新型コロナは思った以上に身近になってきました。気をつけていても濃厚接触者や感染者が出でしよう。自分や家族がなるかもしれません。もし、誰かが感染しても偏見や差別が決して生まれぬ、共に助け合える「人にやさしい」小学校、ふるさと三輪南であつたら、皆が安心して生活できますね。